
中外雑記

天台

●**天台宗** 兵庫教区で震災犠牲者一周忌法要が、兵庫教区災害対策本部、天台宗務庁、延暦寺の主催により、梅山圓了天台座主を迎えて、十六日に神戸市兵庫区の能福寺（雲井世雄住職）で奉修され、上中善信兵庫教区宗務所長ら教区役職員も法要の準備や当日の運びなどに追われていた。上中所長は、「教区の被災寺院は、約二百カ寺あり、宗費減免の適用も受けている。応急の修理はそれぞれ行なわれているものの、本格的な復興にはまだ日を待たねばならない。各寺院では、周辺の被災された方々とともに復興計画を練らなければならないだろう」と語っていた

曹洞

災害対策会議を開く

●▽宗務庁は災害等の緊急事態に備えた対応策のマニュアルづくりを進めている。二十三日には災害対策会議を開き、兵庫県南部地震で救援活動を行なった曹洞宗国際ボランティア会や全国曹洞宗青年会の代表らを招いて、現場からの意見や提言、要望等を聴いた。災害発生時の初動の遅れが指摘されたり、現地との連絡方法や救援態勢のとり方・あり方など、具体的な問題点が論議されたもよう。所管は総務部の福祉課

▽全国曹洞宗青年会（桜井朝教会長）は四月六日、神戸・御管地区住民の要望に応じて第二回花まつりを実施する。「震災遺児の支援と子供のための花まつり」となる。御管地区合同慰霊祭実行委員会からは1.周辺の学校に花の苗を贈る2.周辺の仮設住宅に花を贈る3.震災遺児基金のためのバザー用品供出－などが提案されている

▽本紙十三日付第六面掲載の年賀広告中、大阪府吹田市内本町・大雄院住職小坂己蔵氏の肩書に「吹田市仏教会会長」とありましたが、小坂氏はすでに会長職を退任しておられます。誤りにつき小坂氏並びに関係各位に謹んでお詫びし、訂正いたします。

大阪

●**美術** ▽また、山本画伯は十一日から十六日まで、神戸市中央区元町のこうべまちづくり会館ギャラリーで開かれた各務寿晃・善祥寺密教院住職（兵庫県三木市口吉川町）の「阪神淡路大震災一周忌追悼供養－いのり－六千仏莊嚴仏画展」に仏画を賛助出展した。各務住職は山本画伯を師と仰ぐ仏画家で、震災犠牲者の供養に「一人一仏運動」を展開し、集まった九千体の仏像をパネルに貼り展覧した。同画伯はこの運動に協賛して自作の不動明王、観音菩薩などの版画や仏画絵はがき（山越の阿弥陀図、地藏菩薩、胎蔵界曼荼羅図）等を頒布し、お礼や供養に集まった三十八万円を義援金として神戸市に寄付した。

真言

震災慰霊に押絵千体地藏

●**高野山** 押し絵のみやび流（小西絹甫家元、兵庫県芦屋市公光町三ノ五）は兵庫県南部地震の犠牲者を鎮魂するため制作した「押し絵千体地蔵」を十五日に、常光院（山崎泰廣住職、神戸市中央区東雲通一ノ三）に奉納した。当日は本尊・十一面観音の周りをみやび流の「押し絵天女像」が舞う本堂で「押し絵千体地蔵」の追悼・奉納法要が執り行なわれた

▽小西家元が「押し絵千体地蔵」を発願したのは震災前から。同流は昭和六十二年に創流百周年を迎え、三年がかりで会員と制作した「押し絵曼荼羅」を総本山金剛峯寺に奉納。千体地蔵はそれを引き継ぐテーマで、愛知県津島市内にある円空作の千体地蔵をモデルにすることが決まったが、しばらくは制作意欲がわかず、また他の仕事に忙殺されたりで制作が延期していたという。そんな中、昨年一月に大震災が起こった。小西家元の一軒を除いて隣近所は壊滅状態。その瓦礫を見ながら小西家元は「震災で再び生を受け、わが身に与えられた押し絵の技で何をなすべきか考え...犠牲者の方々に思いをはせ、その御霊の安らかなることを千体のお地蔵様に託す」決意をした

▽同流の門下生から助言を得て、その結果「1.犠牲者の名前を地蔵に添える 2.犠牲者の名前の申し出を受けるため各新聞で呼びかけてもらう 3.縦二・二メートル、横一・八メートルの額状に千体を張り合わせ、中央部に中尊と六地蔵を配置する = 写真【写真は省略】 = 4.一周忌に常光院に奉納する」ことになった。最終的に百八十三人の墓碑銘が寄せられ、幅四センチ・高さ八センチの地蔵一体々に犠牲者の名前が書かれた。「『押し絵千体地蔵』は二百人を超える制作、協力者、またライオンズクラブ国際協会 3 3 5 1 A 地区など幾多の温かなお心を得て完成し、ご奉納することができました」と小西家元は感謝している。

大本

震災犠牲者の慰霊祭執行

● ▽阪神大震災（兵庫県南部地震）の犠牲者慰霊祭が震災から一年にあたる十七日、梅松苑のみろく殿で午前十一時から執行された。これには被災地の神戸からも多数の信徒が参列。高らかに慰霊の神言を奏上して、被災地の一日も早い復興を祈願した。なお神戸本苑（稲村基安本苑長）の震災犠牲者慰霊祭は十四日、同苑仮所在地の稲村本苑長宅（兵庫県西宮市甲東園）で行なわれた。神戸本苑では現在、本苑建設のための土地購入に全力を注いでいるところ。震災以来かさず執行されている月次祭の参拝者数も増え、本苑は活気を取り戻しつつある。信徒一人々々の震災体験やその中で受けたご神徳を一冊の本にまとめる作業も進められている。